或は敵の大軍三川一川越るをまちて掛
る討義也此れ如きの業ハ如何にと（いさ
と云ふ古来より重き事なし如く初後は云
者を用ふる義也彼が近国隣国の勢を待
てより合戦の難き處に至りて一勢と
波へも動立ぬとぬかさす敵地へ寄て将
（いさゝ）動きて立や又とこゝろん取（行る時に
をと云也

圖ノ一云

跡三備ヲ討テ利アル圖

先二備ヲ討テ利アル圖

跡二備ヲ討テ利アル圖

右の圖の如く思ひよらざる後ノ二備を用て敵
の情を知時ハ戦ハずして敵を退治する深き味
ひ有之
問て云く此後の何と云教ぞや
答て云く陣を取所を問の事と教へし敵が陣
を其儘後ニ討べきことすまさば利あるべき
為後ニ合戦の仕ニ成く彼が利を奪ふ時
来べきの所を伺ひ知て天人地三才の位

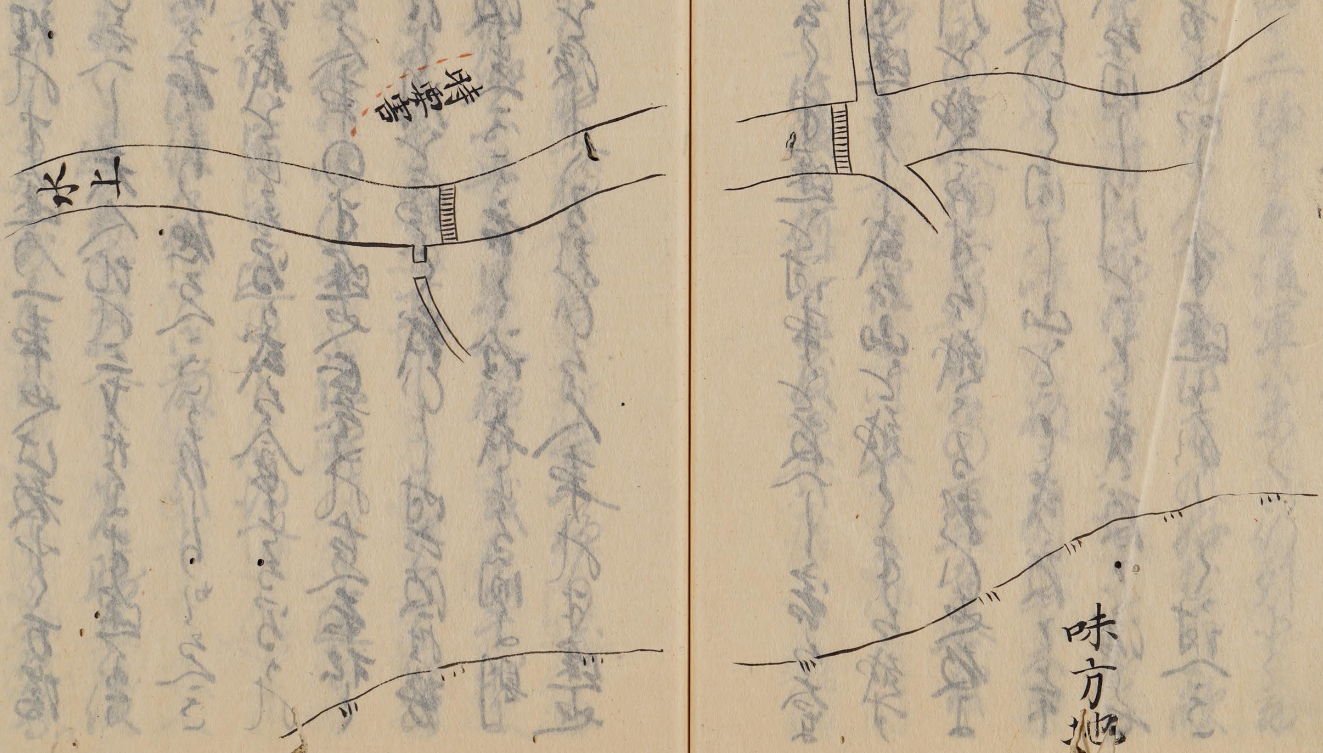
こゝを用て利を得へし居城より境目に而
高くは夜おゐて人数を出せハ敵が内へ
入難し境目の城を攻亡し其後に諸兵
をこゝに置く所也然れは其味方をして出へし又まく
境目を乗とるなり水をも汲てハ津兵衆
と覚ゆへし不調の者を以て討へき也
同く云く後ろ向を巧み後戦はと
兵く云く小を以て大を敵へし宜敷寡戦

小敵と見て危く遠く寡戦にて敵の
来る場を考へ目とし討とを便り敵を使ひ
分て彼か入る所へ入て追へ掛下りして戦ひ
をも抜さして軽く討へし教ゆる也
皆敵は大勢を小勢にて迷はす討術
也是は戦に下を合戦と云ふ初後の六名
と用て敵の柱を作ひ而敵の主兵
より起こまり置れしるか陣所こて静に

寄ニ並ヘ構ル時ニ戦ハ有テ理也屋ハ歎
軍一備ヨリ二備ト先後軍ハ未ダ列ナク備
静ナル事ト討ル人事也此方ハ好ム所ニ歎
ト不意ニ討ル地理ナレバ三方ト兼ル
修練ニあしくさまバ叶ざる故ニ別して大事
や庸此の古ヘ楠正成卿の若井寺合戦ニ
本備陣ひしが此理ニ叶ひしと云り
問て云く此後ニ何とか若敗候ト

答て云く半渡を討事を疑へし宮ニ奈ま
故ニ半渡多し或ハ山を越く半ハ越す
或ハ川を越ニ半ハ越ざる耕ひ也故ニ
歎を使ひく同し山をとこし我ガ渡と上下
さん或ハ同し川をとこし我渡て渉し也
歎を帯しかし半渡と知しく討へさ
なり

川の當ニ云



上水
味方地

右の此理の未達乃一事也とは数多く可嫌
と申ひ知へし夫人は此の三重にて未達なり
経云ハ歌ガ右より他の人へこころありかたる人さ
かくし論義とは白写の式の食出写られ
載いたる人事の未達也只景文の古へ末松く
六波羅より川を渡く戦ひし時六波羅勢
川を渡るへこころ右して論義せる問よ則
訛川を渡しへる戴ひたる人事の未達也

又言より良へ移り京より言へ移りの式右
言方林縁小少く早へ移りの式右日早蔵よ
多年の言方篤甚しここに於て下り将の
未達也右の申ひ少く諸事の未達とな
案へ付ハ諸未達也とくんぬ見へし
同く云くは後の何とも教候とく
若く云て達なると覚へし先勝て後
戦よ清なきバならずよそしと云なる

こゝに敵に従へハ理と知れは敵国敵城敵
陣敵勢へおゐて逆戦するにハいかにと云ハゞ
敵の好ミ何方とおゐて利と為所へこそと思ふ
我ハ之を察して由へおゐて利と為ルと云り
家意察し此法の場式を陣法を示す式の下
又合戦式の本逆と討ちは敵の思ひおゐ
さるを逆に從て南るる所逆おゐて海(モ)ある事
本し正義文乃古へ古居乃傳の長門の探

題におゐて戦ひ勝ことして逆おゐて攻守を
おの同しと極り代るにはまハ常に待擬
乃合とせられて至バ見ゆる乃業別て
附ハそれ諸奇正変伏の微妙也しん為
随見也
問曰云くハ後合之文何とは教ゆ哉
答云く敵かなくる所を式を二三目に
味方衆軍とすへこさん為と教へし 味方

は小勢にて而も地利を知敵は大勢にて
而も地利を知らす持久長途を押来る故
小彼是味方長戦は利ある敵の謀略なくして
る長き戦は二三日にして間に長軍をさゝゆる也
下は合戦を長用ることなし晴夜なれば下知
合戦よりして敵の大勢よりも陰覚して立
競ハ不叶しと雖此徳として天文年中は
武州河越にて北条氏康八千の兵にて上

杉憲政朝定等が八万の軍勢に戦ひ勝たり
是長軍也と云り夜は光不角は敵を労
らかしはなりと存して長戦を用へき
なり
問曰云く此儀は何と心得申すへく
答て云く彼伏兵と教へし軍は奇正
彼は三川と府中とは持久味方は地
利と多く知りて敵は地利を知ずして動

る陽也、味方ハ静ニして陣なる故ニ彼是
敵乃来るを遠より間の如所より伏兵を
用ゆべく利なし、其時ハ敵が前より伏兵を起し
四方より伏兵を避けして伏兵を立
置べし、其所ニ伏兵を用べし、是奇正
の両より備を定て戦場を為也、然バ味方
境目の城を守るとき城を敵が攻ると正是也
味方後攻をするとき敵より押ても

来ルハ奇正是也、其両より備を立て奇ニ赤
敵ハ跡ニ伏兵是也
問テ云ク、陰陽ハ何と心得べく
答て云ク、陰ハ能く逆戦し、陽ハ又守成と
用べし、分限ニ随く外を防ぎ境を陰き
堅を要くし、国を所し城をまもる人ハ
と教へし、攻るに教へし如く、味方ハ自国の戦
ハ敵に来する事ハ、敵まもる深く積て

必死の志しなく戦を励ましても勝負を
まちる事あるべし陰の夫也然るに地逆戦
するに教なく敵ハ陣する所を考へ武士
下知合戦するに武士野山の場を討武士山より
よりて下り又ハ河を越戦ハ戦を争ひ武士渡
伏兵武士ハ軍勢を用て利を得るに
路等を防ぎ流を防く術なき逆戦也
拵其党等にしてなさる時ハ又陽なるべく

危き夜に陽の守成を用る教なく徒兵ハ守
其城にし人数を集め争ふに敵を揮ふ
事叶ハざる時ハ怯く要害によりて険に依
不意を謀へ敵の為スル所を見武士味方も入
其謀を用て敵の労を図ひ敵の傍に
擲息を生する戦ひに営寨を堅くし固
所城とするんば小く守成也是其分限
不依く陰ハ地逆戦し陽ハ又守成に用る

義なきハ分限に依て云処に眼をつくるを
肝要とすへし
問て云く此後ハ何とか教ゆへし
答て云く惣て敵と挑む事叶さる時ハ
慎く要害によりて險に依り邑を後へ
敵の為(スル)事をうかゝふへし又小勢にて邑を討
へし此方は味方国境へ出て防戦を威し
く或ハ不意の合戦夜軍等とも叶さる時ハ

慎く要害によりて敵しらハ味方ハ險へ向て為(スル)
様子を見るへし敵しらハ深く彼方へ入こさしてそ
是ハ労すへし又將く彼方へ入こさてすれハ味方
究竟なるへし此夜小敵悪(あくむ)く疋く守陣お
まされハ味方に其方へ入こさて夜軍等
ともはあし彼邑敵ハ多勢に限て勝事
有るへし
問て云く此後ハ何とか教ゆへし

答て云く大敵と懈あし故に寂寞
哉に教しぬく大勢の換を示小勢の途と
知て敵小虚あらば毎攻偽て討へし但是
こし見し晴くしては敵乃虚実を視
説なる故二き常に当るへからさる也
問云く後と何をと教ゆへく
答て云く味方大人の謀を用て二き等を
敵の隙に懈怠と生せしへさん物ハ

教色しとん跡く後に哉に教なきとハ夜云ハ
味方乃先陣とく敵へ押く当り討難く
とて退く敵乃人が結む也ハ又二陣か押く
当り討詳く又退く又敵乃人と続め
く後三陣か又後に七く重これハ事不自由
夜伏にし急に発く討に出也討れさる
内に退く夜奇也けり如く何ケ夜とし
と味方か入也夜大入と夢に姫の[illegible]

立てゝ味方に代るへく体を挙て敵と闘ふ
従之敵なるを防く迚さして城中に待ん
とするか故に夜番の時ならば労と成り使ふに
懈怠生しなば士も変に臨して味方得
易こゝ且又以て民屋河越乃兵軍に宿す
敵夜味方ヘ火を付へしとしるへしと云り
問て云く此農なる又何とも農は如く
答て云く味方に自然なれば地下の農人

職人商人等を士卒乃助に用ゆる事を故
へし械小荷を奪はるかは皆乃用ゆるす
して農工商にかゝるとも書るへしと云乃
理を知る故に地下人は十五より六十
ころ乃者共を撰ひ記也故も刀竹鑓抔を持せ
士卒とかへ隊を付度備に用ゆるを地下度
備と云り又地下人は十五以下六十以上乃
者共は俄旗の印を持せ士卒の卑を助て

然と背山陰式な叢林乃陰ハ陰に鬨(ときのこゑ)を歌
と發して鐵と云んするに為伏兵ハ用ると
乃んも旗乃んも倍にまへ相當の物見を極備
就設旗等を奇兵等物乃んしく剖法よ
敵へ通ハ委細ニ及ふ者の三ヶ條を用へく
味方ニハ書に通し合自國へ入へる敵を防(アニ)
ふかくせくる物の様ニして討へきも鐵ハ大將
統ハ見も旗乃も倍なりと見せ知して意卒ハ見ん

はよりまへく云んとく成も敵大勢の中よ
統ハ物頭一云人ハ功あるまくとおる物頭
數人ハ見んはふりまへく疑ハおきをあし之
見んも旗乃んも倍よ一向擂して打捨無ハ
猶此下處伏乃勝利多し故ニ右の三ヶ
條ハ大將乃用ひ様よ依く大功を為と云り
問く云く此疑ハ何を以敵ゆへく
答て曰く云物大事云所臭ハさる敵味方

不浄のくこそ利を得る事ハ王戦の家宗よ
り係く義の肝文也此大事お傳を申座
しこそ物しる方物也こそ事しるこそくれ
此業なまハ常陀車絶りも陀弾矢寧う
月廣の衛振一向二裏陣若的の業也
こそ房具しる無具也こそ敵味方よ悟くこそ
利をぬくる戦情ある敵也神人ある味方也
先をとくく刀箕ざバこそ射れ敵く味方をも

又分別なきハ敵ハ方物ハ對してこそ乞ふハ南ろ
抜ハ法しと應意しこそ抜そよ傳く無具笥
とも用ひこそ敵く味方ハ悟く利を得る事
ハ王戦の大事お傳也前ろ数ケ條の教第
此理此業ハ源ろしこそ是れ
同ろなくし後ろ何とハ教ゆゑしく
萬くこく絶くく此王戦ハ家業教しぬく
戦ハ先をく陽と教なま也民も存ゆく

陰を従へく陰陽不測の神を教へ給ひし
信也扨の兵戦奇法ハと云兵書ニ不及く戦
立る本しりニ戦ハ用く利ある儀けり
とあり技おしして書頭ひし也兵戦奇法
少云く敵人へ敵を攻る我戦んと欲セハ
敵将変を評く其気を窺しむへき
我迷こ而も意ニ我を攻すこき敵の守衛
く襄へ挑ひ吉植りしさるを詡く害ニ

勇闘の士として気を攻しむへし必務ん
と云くは忘る敵が敵を攻る時こそ尊
ハまと戦へバ、味方衛が相対して味方務へさ
事不定也攻ニ将変を評く窺ハセよと云
忘る先んくふ居し患く我と蔵ハ是佐
也又兵戦奇法ニ云く歓義彼密く為り
敵ニまつらバ将く戦よへりしすの敵芸
と為士卒敵を顧るニ安く常ニ人を

集の数を荒め城を保ち淡に使へて籍乃
を得べし彼挑戦の事をなさせ猶擁護しせむ
其国敵を偽て邑を討べし猶勝んとせば
はなはだ敵をまねくことなるの時ハ王ノ
自ら身を終らく戦を挑んだるへからすと云
ありたる士の婦人を城に集め士卒を為ん
に急なる事なきにハ家長を改て士卒家
を顧るにあらさるべからずハ浪人

一 祈し定るべし数を荒城を保険に使るく
あたる城砌城要国に保ちおきを築く朝
ひ営根を堅くあるの我也敵の種乃を経
時ハ敵挑く戦の事成るに敵国への通路讦
に依る事方端を持して擁る事成さるも氏
のかく容の国しむ敵へを偽て討時た
必務んとせ未竟天理にかなふ時は荒人
集り数荒るべき人にて数々と籠る城也

但城を保ことして、人此れ三険の体つけ
まハ危き夜よ三陰よ体へし前よ兹し
私能の自由を積ままを戒めて其如く出
ハ敵を知事あくこゝ積道をこと自由よ
従て経に云り、又百戦奇法に云く、戦ひに所謂
ちるちあち己を知ると知て去く己を知て来て勝へ
かくそる其理ある時ハ敵且固く守て敵を
以て勝負こゝの理ある時ハ然とおしくかく

邑を攻勝ましと云事、兼ぬしと云く
は云ちるちるちるち己を知とあしく従己がん
主力れ従と知て敵に勝へここ理あくる
先して地に往しく来てちるて敵と防へし
孫子よ従ひ問よ味方を出へ当れ兼れる出へ
し勝よ敵よ勝へここ理ある時ハ剔戦へば必
勝へし孫子云ば地利ありて云ば数場へ敵来て
来らざる間ね討ましして数場へ敵を

川にて討れしとは不天理人事をしらく
まへし平意右衛門古郷を忘れさる
を府あらすへきにや又百戦奇法に云く
我若敵人の行陣整く且乱るならば未与
戦に今(ママ)しすとも宜く襲を圓くし主陣不
く主裏るを伴ひ起て是を討備して
云事あるとすれしく云には敵かん
行陣の作法整く乱れたるを討んとする

来れのまゝ先へて丹後守行うる信ふかく襲はば
堅くし敵を退へし味方の堅固を歓よ
ア被る人にさしとすまゝハ労るゝて又陣久し
く主ハ害我彼よ坐居おるかく乱れ主襲る
ありて彼是を労れ襲る時を伴ひ我よ
時ハ猶まさしく云事のしとありて襲を固
くせるしとも平意右衛門戦は陣中陽かえ
備し敗戦は教ると考合せしくすへし

強云ハ味方乃地をもつて敵の大きを防ぐに速手
の遠石をもつて敵の力を防ぐ故ハその理也と
ん也し又而我奇法に云く敵人来く来
る三手流なれバ速に我より利あらず敵陣
と深く入りて黒をとるべし安くせまく廊
する事なく三攀をはさ若彼事をもつて敵
と捲り我ひと来るも又勤へりしと云
くは忘る敵がなくしりまり三手流

なりとも敵に従り速に我より利あらずは没すも
遅きと押来るに三手流なるに任く退や
労まことと安んせバ深く討難かるべし挟更遠
路と深くら維ひ流すが盛に見る者労
れざるる寄也又敵の流れるによるまたま
速に我く待事をと忘るへからずま云る待
またも敵に従り三手流なれバ我より遠
と云り。然の古法にも教しめく陣労

不立戦なる事ハ深く秘し安く守りて敵
に應して事を延引して敵の備に撃む
事を待へハ是敵ハ深謀ふかく戦ハんとて守
る者ハ備へこそ理なきにあらす動くへし然能
角戦はなき備はれハ是ハ危うさ我よ陣を深くし
塁をとゝめ(?)し安くもちこたへし早く敵
より写を用く川を戒ち伏を武と大
旗を武たる者の親ミと謀して味方を迷ハ

しむる事川田乱暴敵大へ当て術なく陰と
敵をくミ立競よし先角川中よ至戦を座
こそとするものよ戦へハ彼ニ従ひて負る
なまきハ必戦へうしすくみ義を前ふまし敵
しめく味方ちくて地に備へおく守り
彼が思ひよしなさるに附るよ不意よおく
戦ひ備へこそ延絶く是戦ハ初ハ当陽と
教ことも終の古くハ陰を為くて陰陽

不測の神を傳ふる経也古語六ヶ條ハ一よ
将を愛し二ハ軽忱の戒め三よ己を忘れ
し四よ敵ハ流守を知り五よ壁を堅くし
六よ安守する也是皆武長の要也

容戒

問ていはく此後ハ何とて要ゆやと云答ていはく
容戒を教へし容戒とハ我進みて
敵を討と云也此云ハ賊の立て国

民を悩まし府ハ我止事を得ずとれ容て
成く賊を攻るや容ハ他国他家へ働き
かる事よ陽也進く動く物ハこ王くば陽中
ハ陽と成く破ると安し敵よ我ハ陰なり
陰とみえて陰陽兼備也ゑたる也然るに容家
の虎に乃書龍に取戦乃陽中陰ハ有之
と考合てすべし是て忱密護の習を
取敵よ勝ましと云事明しと云ハ修行

主将と知る事ハ全く勝事叶ハすと主将と
云ふ者己れよ非義をはなれ正しくて後よ
賊乃非を攻る事、いましバ内を治る事も一
なり我常よ先きて乃忠よ應して下く人忠れ
三験叶ひへバ初後の三義を用く敵の根を
とゆりよ兵を攻よ従ひ敵人数年のかく成く
敵国へ動こへ大損し而突切る事なく
又難をと付る事もなし　滅蔵の恐れ無く

武ふ捨（ステ）武ふこれ虜むる支前後左右よ根を
不信り其地こ而義を以くして不義乃治さ
不恥く討難し虎狼等の猛獣を方便
好くして不衆こそとゝるがかし敢よは宏裁
此修くよる治械を備へるは性と多くある
修くよ世及るる也
一　持の城を無益よ攻へ家国乃険を失ふ事
なくして動くへしは兵ふ前よして敢るの

く賊起て国民を悩し彼を後とし此を先と
べからざる事を専にして敵国へ鼓く
行まじバ先我国を堅固にせる事肝要也
敵国へ行くとも我国へ隙あらバ今少く
戦も叶ハさる時は我国の陣を失ふ勤さ
入色し先我境治めて治国の根也年々云
バ居城境目を守り其ハ家之所作に
分領の親類を以て能く数端を設け

堅固に出入し先居城をも治め依て他国へ
動さぬおもに我は治国の根にある者なれバ余
し悪を重くし叶る也

二 居城境目を守る事大丈夫に置へし此云た
前に教し如く自国の使を堅固にしく
他出へ働く入色し治事万端を自身に
細に云付へしと云まじ八事繁多に過て
叶ざる時は家老に二ん成べく一者を置き常

拘し置べし是人治也然らバ惣人数分あ
バ大内三千程と為るに拘し置候大法ニ
まゝ大成国ハ取分是るに人数をおく残
し置とも稲とす為ニ在所ニ人数欠く
事も是ハ定れるまゝ大権衡を能く事等
らるれバ其間ハ定る理也堂ハ是等の
八分ニ兵糧等ハ数を大ニ多くなる事
味也是大事也とて有り

三 諸士の人質を取て城に籠べし其上ニも
兵ニ不足なるべし或ハ妻子を兵とし或
ハ義理を兵とし或ハ利欲を兵とし其
ほか夜ニ妻を取しらせよんと人を身につけて伝て
兵とする事よくなすべし

四 百姓の中に伎倆(きりやう)ある者を撰出し頭と
村政道をかハりも正(ツレ)すべし 右三四の事
ケ條を事く云ハ百姓の兵を在所ニ取り

夜前の後を伐夜よ江伐夜の後を郭
其内ニ夜影其内の後とも城よ籠め我
小二んわさニ志ふて是とちくて七郭城より
二の郭を押へ二の郭より三の郭を押へ
三の郭より重ての打手を随て小郭を押
申へし但雑人ハ士のかく一て後と夜事
叶さる故よ他ホへ多く在まづるへし功すまハ
他国へ在つるて志其ち国よ掛し遅くる志

其と後わりとん的之国よ残くる志其ち
他国へ内へる志其と後なりとん内く
筋ちよ謀叛叶ハぬ語一致して彼是
こさ事なし是ぞ相て後よ武定

六

指を従へしは言ち害と成くな嫉悪
久きバ後をこと悪さ故よ家茶荒し
隆の指を云ゐ色のしず将之献れ指と
こと来くご知しず地形とこと来て一定ずい付

其の用心として未来ざる故に彼是無患之
為将く戦よへ加はる時も平常敵地へ一二里
近入不損之旗く戦に出ると云一に待へし
是皆敵よ一入附さる気の出ひ安く旗氏
持氏教也起く常を持か旗を持也一旦其旗
を挙るよ於ては理まゝと我宗く成く
討へ一くとする時ハて理よ止く也故に
宗し旅ても是を以旗を持く敵よ識云

ち義是かと明らか知く賊是ある時ハ是と我
義是あらハ是と治むへくや
将く成るを進支あるまゝ其気ハ旗を持め其
敵陣破まく将く成るまゝハ敵利よ一入く敵
よ一入附くりしん内持むん息の安し
是に常く進时ハ却く敵よ便まく味方
敗軍読のいし故よ将く成る敵ふ乙る
慶伏是あるへししん内く根りよ進へから

すきまを構也功者の敵ハ實ニ取ル所
ニ目付て、ミし虚伏へ懸ル程ならバ其
人の損と可成也併味方が敵より見レバ虚
バ敵の虚小が実の小ニ成候も有之ても
角ニ至ル所の構手ニより打く敵ならバ
去れ共有りよく浅く有り虚伏起らバ其
虚伏へ浅く有り何ほどよく見も利を取
ある事も有へし是れハよく患を利にして様

右條く変化ある故合戦の度毎に虚
実の構く在ると用る位也彼よ手
目乃修練よりおる微妙ニ渉る時ハ彼之
前ニ従ひ随ふ事方端乃変化ニ随し
先ニと中を構也
彼ハ構を用る場かまへバ去る處を構く
根りよ戦ふ事ならハ先ツ後ハ合戦ニ依
周へ働く有る事なればこそ場也進退を働く

抱ゆるこれバ陽中の陽と如く破まて安し故
に我ひよ先て陰と用て陰陽兼備へし
若官我れ大なるときバ敵れ十倍無千
は宜を考合せて味方すへし如く四節れ虎臼
れ方勢の指して我乃陽中陰の发らを
考合てゐようすへし

八
追手と定むへし元来敵地ゆまバ追
手と定て勝ことを負ぬ様よ我よへし

我くる一藁に地形と能考る何さの云よ
つよんへ右縦い敵れ大将を討れ居さ左
追手へのようすし定むへし宗旨様よ
发し如く追手の定様れて理へ事地理
に依方地理よりての追手を发へし併バ
左右乃関よ山を森林あると敵が隠るへき
所か我方追く敵が近て伏抹と為愈さ端
河ふバ是より先へ右縦い敵れ大将を討

教へ云世は遊へのうすし皆く定る敵を
天理人事とも是非も味ひ候へし遊の陽
之く有る陰あれハ未だ不測乃神ニ至る
時ハ陰陽共ニ自由成ハ不測の神ニ
至るへし此所を肝要ニ勤むへし是を中
と唱むなり

九

乃ち敵を破れは又進て偽る事有りて
ば定まる事を破らるし故ニ然ハ万人の敵と

乃至一人を討事も殘る人の敵ニ活して出て
合候る事ニも至る此ニ取ては勝を云ふ
定まる也是へし我偽を以て成ハ是則負也と
人々へし是を中と唱也

十

敵小勢乃大勢取ばかり矢頭さしの文は常
小数の時防戦付さる乃様に往て城下
へ川其他前後計策を以て討取へき事の
孫子何とそ攻也又之に取ては十を知と体

悪しく思て世間に我乃法を定め浮雲
げなる所にて其業をとれ手柄を討取て返
ば敵の法勢を弱り味方の士卒も勇も
能係て用る時ハ合戦と成也日ごろ敵ハ
勢の大勢にてし弓矢弱みかれ類なくして
静んを乞ふしすハ我鶴若く成バ敵の推さ
に負るをこしめしては我退りて負る動也
又敵の内に乗込て防戦可為手立也

味方の想に成事を在ち大事の小事
おれハ兼ての不和とし和して宛て成て
弓矢を取へこされまバ係たるに之味方御入
事ハ敵乃強くる数場へ好く陥る之法業れまき
ば在の出の自ら火乃中へ飛入かめく形之人
し在よ能笠て三亀 要害に籠れ法を
定もへし浮雲げれバ様に小しても弓箭を
取様ハ初後の三ヶを用しに敵乃様子

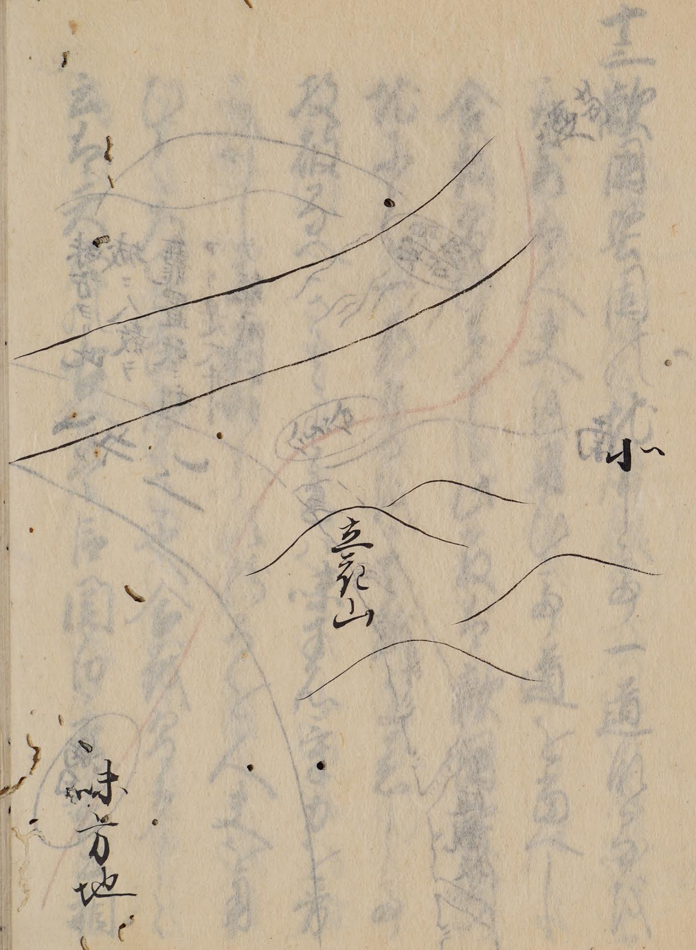
とかく地形と九変并ハ置之地下ニ
これ或ハ付城を築き其勢を通ずる路
根を塞ぐまゝか陣ハ満也又押く付押く
逐ひ行けハ窮食入る歟陽乃満也持主ハ陽
中陣ハ満ならく足皆我離るに密を変して
安くなし敵ハ安きこゝを変して離く為術
なる故よ敵乃謀勢を弱くせ味方ハ士卒
の勇む之始末を用る時ハ全勝をなすと云義也

十
敵を破らんとならハ防戦付の国地へ押入へし
其地を奪くしても計策智略を用ゐて敵乃
内より内伏乃者を振させ敵を破るへけ
敵ひと致し恃けなくして動ハ危し其
ところ敵の内より内伏乃者を振させ其敵を
破るへしと云ハ大事の外なる故ニ常ニ
地国を治めて置く人ハ地の三方に付附て振させ
るよ智臣賢臣を用ゆ又ハ我か方のものにして農工

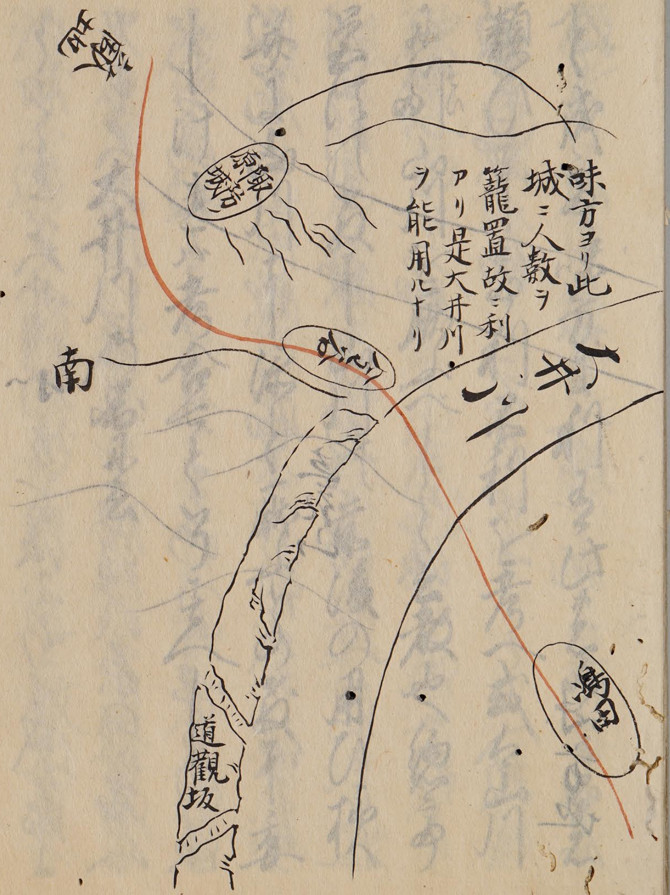
商ハ三民を虐ぐる時ハ賢臣智臣ら去矣
又愚不肖姦曲等ハ臣来り集るといへ
ある也とかく見えバたとへ治る時ハ君子
ともしく敵ハ情を知れる時ハ小人を
生して邪情を人に知られ理政の也は廃
歓ぶ事成なり世賢臣智臣去時ハよろこび雖
し唐の殷の紂王無道至極なりも左微子
箕子比干等ハ賢臣去しあら未いへす

後ゐて微子ハ紂王の無道なるを見て去り
箕子ハ比干ハ紂王を諫めて武王に殺され
或ハ国をとく奴となり少民離れてあれども
多くあまたり然紂王ハ内より周ハ武王え
帰依しける也賢臣の往に答しかし况
前のごとくの意味なく此事を論せ無代
これ働さへが能く意く計策智略
を用て敵の内より帰依の兵を招きこと

夜となる所付け戦ひを敵して挂けおくし
これ働入也
十三 敵地へ働さ入へからず山より離山と厳よ川有
瀬よ川と厳よりまん所道えしは殺る山川よ
到武る山川と厳よ大事修く有り主宿
に依て深く云厳よりてよ大事乃人物き
也移云バ大井川と蒲く戦よ付よ浜松の原
乃城に味方人数を籠置くると敵攻座さ
しるまてバ大井川乃方と後ふ取し武る勝よ
なくて大井川の岸より浜松の原の塞人
定る路数多くあるバ大きに路より味方の後
攻むり来る敵に勝よりて武る後より
討よ利有り敵る後攻を防くへ抱えかれ
バ城のまを勝とし武る後と付る勝手
彼是敵乃働き不自由よしく人数代
合よバ付もなすへんと敵る勝よあるん



とく敵の味方に利あれはみかたのさきなれ
難しき時は敵の利不利を考へ或は山川
みかた山川を勝とすへしと云教也惣の
兵法は教に山川は前後の用ひ様
毎に山川に添て勝とるの教に妻
しけれは考合せて可見之
大井川乃図也



十三

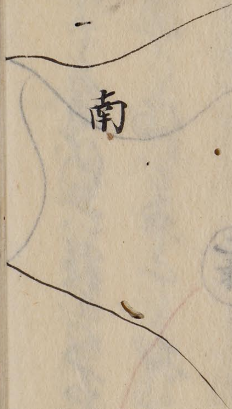
歓国要固とは敵ゟ一道ゟ来て戦
ふ時味方人数少く用ひて一道を防くへし
合戦あらは多くして敵を歓国要害の
地にて一戦して味方勝つ也若又敵
攻破るへきことあらは味方も敗すると労
らかにして利あるへき所にて人数を用
ひよると当国にて合戦あるへし
云ふ天正に古来豊臣関白秀吉公相

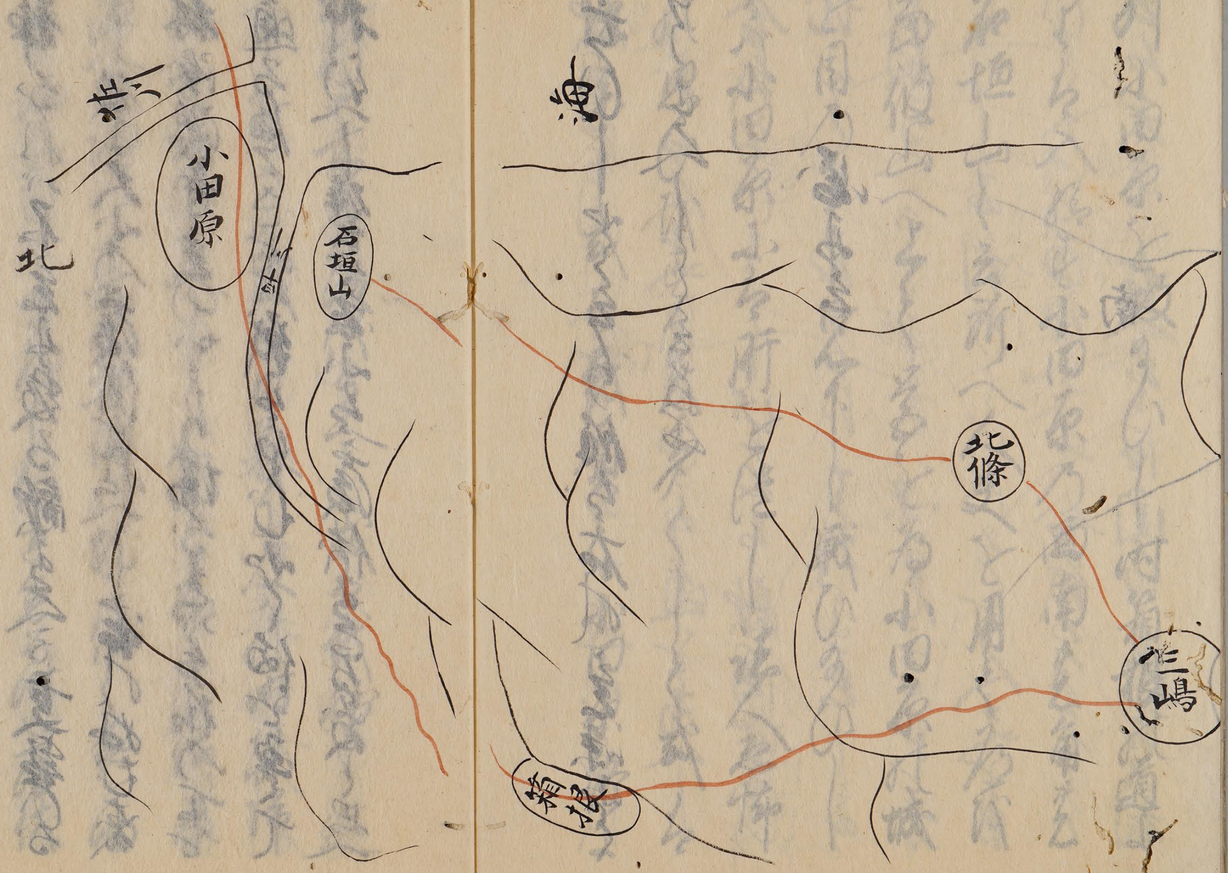
十三

列小田原を攻めらし時箱根の道よ
りて入給ふに小田原乃西南乃方の
石垣山と云所へ人足を用ゐて陣
営彼山へ上りて第と為小田原の城
を目乃下ニ見下し戦ひのあひし
ふ小田原小石府を陸し諸人恐怖
の思ひ弱れる者多くしても武士
陣気し武士気負く小田原終よ

亡ひし也云り婦女子乃口吟云味也
てきへしと云ふ義也

鶯丹云




早川
小田原
北
石垣山
海
北條
三嶋
箱根

山家林険阻ニハ伏兵ハ疑敷事もあるものなり
戦ニ望むべく備と見えて押行べしとハ心元
なき事敵地なるに味方より働く敵も
静なれバ不意ニ変ある敵なれバ甚疑しき
し故ニ大小の伏兵と心得べし密に好む処
林険阻等之のかまり場なれバケ様の所を
通る為ニ付ハ戦ニ望むべく備と見えて
押行べし然バ敵より伏兵をあらはすと思へ

バ則ち其所ニ伏兵有べし或ハ戦始まる迄
事なくして或ハ日暮ニ及ぶ時ハ必帰
路ニ伏兵有べしと心得べし其子細ハ帰り家
陣へ急ぐ時ハ其所の要害ニ心付ずして忘
し油断をなし何事急なる時ハ伏兵
ありと心得バ其気味と知る伏兵の場と知る
伏兵之数を考へ合せて押行べし
一 士大将敵地へ働き入ル長陣と成候ハ兵糧あるべくバ

批下と號りもへりしすさんな歟批へ聽ら入
七津とはへことん留何しバ神社佛閣を綴る
事な云不及バよし武な歟批乃妻子等を
棄失類ひれ言葉を為まもし而批下と號
づる也趣のし此と云義也

十六 刈田乱暴致す事利不利と考へ武な勇ひ
武な用る事あるのまし刈田乱暴致す乃利
あらされ慶伏を起し武な大を隔にして

歟の四ケ條を為國こころ而武な小指を廣く
なくは海と合指を法度こころ而武な険阻
守りへる歟を勤而して言にれし味方
川清りくことしある使こころ而武な軍終
而後味方れ法度乃心に深く著へる
を無了勵すへきこころあれまさバ利不利を
考へ武な用ひ武な用るのしよもし言武
是く揮れ教く考へ合一而可伝へ一件 被まし

利に貪るが故に世乃福(さいわい)に助けまして國民
と若の絨し成るが故よりて變(そうむ)田畠伐宝
等と或ハ没収し或ハ放火して甚ん祈を
苦め絨情を離して非を知り世旅下に
為へし賊に與して味方の義兵を防ぐ
民ある云ふに及ばず所々にも敵にと味方
にとあらざる海道彼官拯なく害(がい)を
為事こともあへし右松の者共の底事か

放火して或ハ奪ひさるゝ賊の力を教し
絨を離して義兵と為る民を安んずへ
こさある延軍を将ひして戦ふて我を止
河意に同し焼されまじハ民命に如くも我焼ら
バ賊寺を奪ひ去れ将失て使ゐ宿らく
ありけりや世後に於ても々神社佛閣を
こと厭ハる故火して賊亡ふる後ハ兼ねく佛
神の信仰すまし神社佛閣を建立し

勤様十其名をしまて置し事ふ不其名去
しとヽ云ヽは此類ひ也

十七 違くに物かまつまゝへし疑云ハ方人乃味方
なりバ其手人ハ敵まて違さる手人ハ度
伏兵とあしく違く所毎よ疑し定不
意を討へし敵若かまり攫へ来らすハ
別敵れ儲し成也ニ手何事に疑也利
ある事とあしく違く難ひハ皆物かまりて之

故よ済涼ふ信り物かまりして別よ勢代
命く隠することあこさ捨も此れおこさ捨る
涼と叶くさ時攻所なくニ其功大之武功よ
敵比へ涼く入て違く涼功し者会なる
まへし

十八 勝而後終と慎むへし此教る勝て云
其勢へ兎角と論へ又方角ハ行の備
終或勝覧とあ行ひ終と慎む置し

忠義也常に教へし旨を悟むる言を深く守
ばけさるや敵ゟ心を賊也と知りて其を度
ば師く小河と遠事しれく遠留とさため
戦は備事何ケ度々くとも安し都く我よ
不義あまりばて爲弐をされは彼小指と悟む
意をとさ更にも終りとこそ悟む但し戦ひ
指にゟ心安く思ひ忘りおわ武ゟは敵を
討つる福よこそ國彼に父の味方は手に入

但し士卒をとと貴しみと多く宛かれば
あ給也とし思ふ家へ帰るゟ元敵ちて家にゟ三
乃甲合戦とすまさば味方れ負製ひ亦し
彼小敵を討亡しててとも猶敵が持ちへさる事
とまらしく條但ゟ是小栗氏康河越より
要軍よ指て松山の城と取り集りの場
しを定てられしとも我のみより城中俗に
河をよ足接にゟ定てられる義也

或地戦山をつゝき河に添は敵を山河に沿はす
地来れは宿しぬ途と號して我か城に
引縄と法次にて敵の城下と向ひ竹柵を
城のうちに地形とこれを勧入度しと云ハ我
あり此条より攻よせ敵地へ入故也故に氏
去地戦ハ敵在ハしかや敵方を中を
我国にし味方を動く静かにさる故に
好む地利を得難しは故に先静に致度

ここなる山地より押入陣を営ことを教え
其体は沢なく陣するより戦なく要
国とこれを攻して入度しと云云なく地戦と
戦の字を解くる時は文山に前あれは険阻なる
或は敵を覆ふに利ある又河に添は用ある
役事を致すへし也其くは戦地の後に従て攻城
乃水攻火攻の戦功し専合せしむへし
敵地の山河と味方の利とを用て攻へし

廿 所務をさだむべき事

法を修へしは兵の業職にて殺す事なれ

大将を始め終に敵より味方を損ずる哉

ぬるよう自ら三略六韜の動静をまなば

危き事なし敵より謀る計慮さへ

出る共は方よ虜にならざれば敵の計が皆

其事よ為すべし兵の職は甚だ考合ある

可修へし

廿一 与へさるを攻べし 此義ハ王の賊く成る士

農工商を悩し常に傍よ有能不足は求

何へ攻べし 総ハ地理也 云ハ城を築の

構を設くる敵をハ向城を築きて攻る事ひ

は言也 其外敵の法を知るに事也さる

の利欲を好むの心情に溺るる者をひ

ひて天人共の怒りある所を攻随し

して国の為を修め三民をあはれむ国安

とあるをとハ他国より色々国郡を
奪ひとる事無法にて向ひしく民を
苦しむる義也
廿二 又かゝる所へ己ハ義ハ我ハ義無也敵ハ賊で
四民ハ水火の中ニ陥るを救ハさるは无きと用
ゐる味方を防く人ハ他地へ行也彼ハ爵禄
とらせむ為ニ此方乃旗下に成る敵をも
本ハ此らより手爵を高くし禄を与へれバ

当時ニ敵ニ従ひ此方ニ帰りたる忠爵禄ハ
貪る人なれハ他へ行也賊ハ主有て士農工
商の民を暴く虐け四民共ニ水火の中
に陥り溺人ハ家職を失る事と
又父母妻子等をもの事とし守る父母
妻子をこと或ハ凍へ或ハ餓へ悉く離
散ハ為ハ義無を絶して主人
ニ対人ハ本より帝王ハ将なる我

是此見はまるるよ出びず此事を知るべし
きゃ冬を能く前様を征討せば大早小
大雨と稱ふぬくおく置味方を謀く人
ゑえへさゑ先ちてさると政人の先地へ行
納まらば必定く戦ひ勝也此夜よ民長の爵
禄を貪る人かくて地へ行く教ゆる也
廿三 方角神仏の曲尺と弁へずして初後の六合
を用ひ敵の有所不意を知りて吉を

ちより当務の理を失はゞ能応変せず
此意ある者は偏くは皆士濫用法の四字要
小治内知れ応変の理を根かくすべし
バ十に此夜皆行く収まらバ方角神仏の曲尺
を知らざる者士也治内也初後の六合
を用ひて敵の有所不意を知る者
濫不知者也只管にて当時の当務の
理知らざる者用法不知応変也故よ

民長は終りより就度候へハ官職拾被仕
候事也

49-1805